ウィズコロナ時代の中小企業経営

歴史に学ぶ

第十六回 最後まで天下獲りの野望を持ち続けた？ 伊達政宗

経済評論家 岡田 晃

天下獲りの野望～三つの傍証

「独眼竜」の異名で知られ、戦国武将の中でも高い人気を誇る伊達政宗。一五八九年、二十三歳の政宗は東北地方の南半分を勢力下に収めることに成功したものの、豊臣秀吉から小田原参陣を求められ不本意ながら秀吉に従うこととなった。秀吉は小田原の北条氏を滅亡させ天下を統一、政宗は「あと十年早く生まれていたら天下を獲れたのに」と悔しがったという。

だが政宗はその後、豊臣政権時代を経て徳川幕府が発足してもなお天下獲りの野望を捨てていなかったフシがある。その傍証がいくつかある。

【傍証①＝関ケ原の戦いの際の行動】 関ケ原の戦いが起きた一六〇〇年秋、東北では、石田三成と連携する会津の上杉軍と東軍の最上（山形）・伊達連合軍の戦いとなった。だが関ケ原の戦いが終わった後も政宗は、上杉方となっていた旧領地の奪還を図ろうとして戦いをやめなかったほか、同じ東軍方だった南部藩の領内（現在の岩手県）では一揆を扇動したと言われている。もし関ケ原の戦いが長引けば、がら空きとなった江戸に攻め入るつもりだったとの説もある。

【傍証②＝長女・五郎八姫の夫である家康の六男・松平忠輝を擁して倒幕を計画？】 忠輝は文武両道にすぐれていたが、父・家康に疎んじられ、兄・秀忠ともそりが合わなかったため、政宗はそれを利用して忠輝を担ぎ倒幕を計画したとささやかれている。それが関係しているかは不明だが、忠輝は大坂夏の陣（一六一五年）に遅参したことなどを理由に家康から面会禁止を言い渡され、家康の死後には秀忠から改易処分を受けた。

【傍証③＝慶長遣欧使節団の派遣】 政宗は一六一三年、家臣の支倉常長とスペイン人宣教師ルイス・ソテロ率いる百八十人余りの慶長遣欧使節団を派遣した。一行はメキシコを経て、ヨーロッパに到着し、スペイン国王やローマ教皇との面会も果たした。貿易促進が目的とされているが、真の目的はスペインやカトリック勢力と軍事同盟を結ぶことで、政宗はそれを利用して倒幕を計画していたとの説が根強くある。前述の傍証②と絡んで、政宗の長女・五郎八姫がキリシタンであったこと、領内で多数のキリシタンを保護していたことなども、政宗野望説の根拠となっている。

真田幸村の遺児を匿い、男子は家臣に～幕府にはウソの回答

以上の傍証のほかに、実はもう一つ、あまり知られていない傍証がある。真田幸村との関係だ。

大坂夏の陣でのことである。五月六日（旧暦）、徳川方の伊達軍は道明寺付近（現在の大阪府羽曳野市、藤井寺市）で大坂方と激突した。この戦いで大活躍したのが、政宗の重臣で「鬼の小十郎」と呼ばれた片倉小十郎重長という武将だ。

重長の父・小十郎景綱は政宗の第一の重臣で、仙台藩の支城である白石城の城主を任され、一万三千石と大名並みの待遇を与えられた人物で、そ

の嫡男の重長も父と同様に武勇にすぐれ、親子二代にわたり政宗から絶大な信頼を得ていた。

五月六日の明け方から始まった戦闘で、伊達軍の先鋒をつとめた重長は大坂方の有力武将を次々に討ち取り、午後には真田幸村軍と激闘を繰り広げた。重長自身も負傷するほどの奮戦ぶりだったが、勝負はつかず、日暮れとともに双方は軍を引いた。

その夜、重長が野営していた陣中に、若い女性が駕籠で送られて来た。聞けば、真田幸村の娘・阿梅（おうめ）だという。当時十二歳。父に従って大坂城に入城していたが、幸村は道明寺の戦いが終わった夜、「明日は最期」と心に決めたのだろう。そこで、先ほどまで敵ながら見事な采配を振るい勇敢に戦っていた片倉重長を見込んで、阿梅を託すことにしたという。そして幸村は翌日、家康の本陣まで斬り込むなど華々しく戦い、討死した。

大坂の陣が終わると、重長は阿梅を居城の白石に連れ帰った。やがて阿梅は成長し、正室を亡くした重長は阿梅を継室に迎えている。阿梅保護の経緯については異説もあるが、白石での経過は紛れもない事実だ。

それだけではない。幸村には、この阿梅を含め十三人の子どもがいたが（人数には諸説あり）、夭折した女子と大坂の陣で戦死した長男・幸昌（大助）を除く十一人のうち、京の周辺などに隠れ住んでいた幼い五人（一男四女）を真田家の旧臣たちが密かに白石まで送り届け、重長が匿って養育したのだ。

そのうちの男子（次男の大八）は大坂の陣の時はまだ四歳だったが、成長すると片倉守信と名乗った。重長は大八を保護して養育したばかりか、片倉の姓まで与えたのである。大変な厚遇だ。

徳川の天下となった中で、これは相当なリスクのはず。露見すれば、片倉家にとどまらず、伊達家も幕府の追及を受けるおそれがある。そのようなことを重長が一存で実行できたのだろうか。

政宗亡き後の二代目藩主・忠宗の時代のことだが、片倉守信の存在が幕府の耳に入り、幕閣から伊達家に対し問い合わせが入ったことがある。重長は忠宗と相談して「守信は幸村の伯父の孫であり、息子ではない」と回答したという。伊達家と片倉家はウソをついて幸村の息子を守り、自らの家も守ったのである。

「野望」＝高い目標に挑戦し続ける経営

これを見ると、すべて政宗も承知の上だったと考える方が自然だ。むしろ、政宗の意向または指示によるものだったかもしれない。

また、幸村の娘たちは成人後に伊達家一門の田村家や他の大名家に嫁がせているが、これも政宗の意向なしに実現するはずがない。

もしそうだとすれば、政宗は「いざ」と言う時が来たら、伝説となった真田のブランド力を旗印にしようと考えていたのではないかと思えてくる。

もちろん明確な証拠はない。だが政宗は真田家の他にも、長宗我部家など豊臣方だった有力武将やその家族を何人か匿っている。前述の三つの傍証も含めてこれらを総合すると、天下獲りの野望は捨てていなかったと見ることは十分可能だろう。

天下獲りの野望があったかどうかは別にしても、政宗の一連の行動からは、慶長遣欧使節団に見られるグローバルな視野、真田の名を活用したブランド戦略など、今日の企業経営でも通用する要素を学び取ることができる。

そして何より「野望」、言い換えれば、高い目標を掲げて諦めずに挑戦し続けることが、現在のような困難な状況を乗り越える原動力になることは間違いないだろう。

岡田 晃（おかだ あきら）

一九七一年、慶応義塾大学経済学部卒業後、日本経済新聞社入社。編集委員を経て、テレビ東京出向。「ワールドビジネスサテライト（WBS）」マーケットキャスター、同プロデューサー、NY支局長、テレビ東京アメリカ社長、理事・解説委員長を務める。二〇〇六年から大阪経済大学客員教授（今年三月退任）。